

説教 『マリアの偉大さ』 山本 護 牧師
聖書 イザヤ書 9:5~6/ルカによる福音書 1:26~35

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちにあたえられた(イザ9:5)。「万軍の主の熱意」が「ダビデの王国と平和」を実現させる(9:6)。それを実行する男子の誕生である(9:5)。イスラエルの民は、大国の支配や高度な文明に飲み込まれることなく、主の約束を自らの炎とし、圧迫と蹂躪を受けながら、恵みと希望に生きた。預言が彼らを支えたからだ。「(神の)王国は正義と恵みの業によって、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる(9:6)」。この民は、イエスの誕生を見ることはなかったが、恵みは「今」立てられており、「とこしえ」に支えられる。

六百年の後、天使がナザレの若い女マリアの許に現れ、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる(ルカ 1:28)」と告げた。彼女にしてみれば、天使から突然「おめでとう」と言われる所以はない。これまでの人生でも、祝福を受けるような手柄は心当たりがない。だから「この言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ(1:29)」。マリアの心情は、不安で否定的なものだった。

後代の教会は宣教の過程で、土着的な地母神を内部に取り込み、イエスの母マリアに特別な位を与えた。そうした経緯から実像とかけ離れた聖母イメージが作られた。マリアはある意味で偉大だが、女神めいた偶像を仕立てて、恵みを割り引いてはならない。彼女は、無力、無知、素朴な田舎のおねえさんだった。だからこそ恵みを己自身に満たし得た。これがマリアの偉大さだ。福音書はその人物をさらりと伝えている。おそらく夫ヨセフはすでにおらず、マリアはイエスの弟や妹をぞろぞろ引き連れて、「おまえは長男じゃから、ちったあ家をスケてもらわにゃ困るがな」とやって来た(マルコ 3:31~35)。

不安に陥ったマリアに対して、天使は「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた(ルカ 1:30)」と告げた。「恐れるな」とは、弱く乏しい者への呼びかけ(2:10)。マリアは、弱く、乏しく、光を見失って闇夜に脅える民(2:8)の「先頭」にいた。紛争と疲弊に喘ぐ現代においても、光の差さない片隅でひっそり隠れているマリア。そうであるがゆえに、彼女は、私たちの先頭にいる。

天使とのやりとりがあり(1:31~37)、マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように(1:38)」と「祝福を受ける器」になることを決意する。これがマリアの偉大さだ。貴婦人みたいな聖母にちやほや「引き下げ」てはならぬ。マリアには恵みが必要だった。現代の私たちとて同じではないか。だから「恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた(1:30)」という祝福を聞きうる。たとえマリアほど、「この身に成りますように」という覚悟がなくとも。

「おめでとう、恵まれ方。主があなたと共におられる(1:28)」。主が共におられる恵みを聞くキリスト者は、各々の器らしい証人となる。器であるためには、知力や体力、徳や志などはまるで必要ない。ただそのまま、恵みの器であること。そして願わくばマリアのように、自らを空っぽにして、恵みをこの心身の隅々に満たしたい。彼女は恵みを満たすがゆえに、十字架をもその身で感ずることになる(2:34~35)。ありがとうございます、マリアさん。降誕の意味が少しずつ分かりかけて来ました。



【おまけのひとこと】

恵みは 甘味と脂肪だけでない しょっぱくもあり 辛さや苦さをも含んでいる 世の多様に応じて味つけは千差万別 鍋の底には十字架の滓が溜まる そのひどいえぐみ 恵みの究極の味わいか